

「古い道具と昔の暮らし」の学習について

福士道太¹⁾

Learning Support for School “An Old Tool and Old Living”

FUKUSHI Dohta

キーワード: 学習支援, 出前授業, 学校教育, 小学校, 新学習指導要領, 古い道具と昔の暮らし

1 はじめに

当館の教育普及事業の一つである出前授業は、例年70～80件ほどの実績があり、中でも特に多いテーマが「古い道具と昔の暮らし」で、小学校3年生を対象とした社会の学習である。過去に本県で使われていた衣食住にかかわる生活の道具を学習資料として紹介し、実際に使ってみる体験を通して今と昔の道具の違いやくらしにおける人々の知恵や工夫について学ぶことができる。

学校が博物館を利用する根拠の一つとなっている文部科学省が示す学習指導要領は、10年ぶりに改訂され平成29年3月に告示、令和2年4月から完全実施となった。新指導要領に合わせ教科書も改訂されていることから、学校の博物館を利用する活動に何らかの影響もあることが考えられる。

そこで、ここでは改訂された新学習指導要領と教科書の「古い道具と昔の暮らし」にかかわる主な部分を分析し、それを踏まえて新しく作成した学習資料を紹介する。

2 新学習指導要領

小学校学習指導要領 第1章 総則 第3 教育課程の実施と学習評価

(7) 学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かすとともに、児童の自主的、自発的な学習活動や読書活動を充実すること。また、地域の図書館や博物館、美術館、劇場、音楽堂等の施設の活用を積極的に図り、資料を活用した情報の収集や鑑賞等の学習活動を充実すること。

小学校学習指導要領 第2章 第2節 社会 [第3学年] 2 内容

(4) 市の様子の移り変わりについて、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア 次のような知識及び技能を身に付けること。
(ア) 市や人々の生活の様子は、時間の経過に伴い、移り変わってきたこと。
(イ) 聞き取り調査をしたり地図などの資料で調べたりして、年表などにまとめること。
イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。
(ア) 交通や公共施設、土地利用や人口、生活の道具などの時期による違いに着目して、市や人々の生活の様子を捉え、それらの変化を考え、表現すること。

まず、総則の記述に注目したい。旧指導要領では、活用すべき施設が「学校図書館」のみの記載であったところ、博物館等の活用が盛り込まれた。公共施設の利活用を具体的に促している意味は大きい。ただ、個々の施設ごとに活用内容が示されているわけではなく、博物館の資料活用が図書館の図書資料活用と同様、情報収集としての施設という位置づけになっていると捉えられる。文字として書物や本を「資料」として扱うのが図書館であるとするれば、博物館の場合は「モノ」が「資料」である。この違いによって、それぞれを活用した「学び」も異なるものになるはずだが、指導要領においては、文言を見る限り図書館と博物館を活用した学びを同質なものとして扱っているように考えられる。

次に、3学年社会の記述を見ると「古い道具と昔の暮らし」の学習に関して大きな変更があることがわかる。旧指導要領と比較すると「県内の伝統や文化、先人の働き」が、第4学年の内容として分けられたことをはじめとし、3・4両学年一括としていたものからそれぞれ独立編成されたことがわかる。ただ、これは以前から3学年が上巻、4学年が下巻と教科書が分けられていたこともあり、実際の指導現場では事実上両学年の内容は区別されていたので、さほど大きな影響はないと考えられる。それよりも大きな変更点として押さえなくてはならないのは、「地域の人々の生活の変化」から「市の様子の移り変わり」に文言が変更されたことと、「古くから残る暮らしにかかわる道具、それらを使っていたころの暮らしの様子」が無くなり「生活の道具などの時期による違い」となり、「古い道具」は生活環境の時代による変化を捉える素材の一つになってしまったところである。

1) 青森県立郷土館 主任研究主査 (〒030-0802 青森市本町二丁目8-14)

3 教科書の取り扱い

本県のほぼ全域の学校で過去に使用されていた東京書籍「新しい社会3・4上」(平成23年発行)における「古い道具と昔の暮らし」の関連部分を見ると、まず、「かわってきた人々の暮らし」の単元下の小単元として「古い道具と昔の暮らし」が設定されており、計10ページ以上にわたり、博物館での古い道具の体験の様子や洗濯板の使い方、いろいろのある家の様子など、豊富な写真やイラストがあるとともに記述も比較的詳細である。また、見学の視点の中に「さわった感じはどうか」という文言があり、博物館での「古い道具の体験」を前提とした記述に2ページ使われている。古い道具を体験することから、その道具の使い方を具体的に追求し、さらにその体験を通して昔の人の苦労や知恵・工夫について考察している。

一方、同じく東京書籍の改訂後の「新しい社会3」(令和2年発行)を見ると、「市のうつりかわり」の単元下の小単元として「市の様子と人々のうつりかわり」というテーマが設定され、改訂前の教科書にあった博物館での体験の様子や道具の使い方についての記載はなく、道具のイラストは大まかな道具の変遷がわかる年表の中に数点描かれているだけで、関連する内容の総ページ数は2ページと激減している。博物館の見学については、記載されているものの、やはり市役所や図書館での調査活動と同様の活動として扱われている。「昔の道具」については、新指導要領の文言が忠実に反映され、こちらもあくまでも身近な地域の暮らしの変化を捉える教材の一つとして扱われている。

特に印象的なのは、旧版にあった「子どもたちによる博物館での「体験の様子」の写真」が新版にはなく、博物館の職員が子どもたちに展示資料を指さし解説している写真のみであるところである。その写真からは、インタビュー形式の来館しかイメージできない。昔の道具を直感的に観察し、体験を通して昔の人たちの願いや苦労、生活の知恵・工夫について考える視点はなく、洗濯板の溝の工夫について一方的に博物館の職員が説明しているだけである。

4 指導要領及び教科書の改訂を受けて

新指導要領と改訂された教科書を見てみると、博物館は子どもの主体的・対話的で深い学びを実現するための調査機関としての機能や役割がより期待されていると捉えられる。そこには、資料そのものから何かを感じ、想像し知的好奇心をひろげる博物館ならではの「学び」は含まれていないようにも思える。子どもたちが調べ学習の過程で疑問に思ったことや知りたいことがまずあって、それに我々が効率的に答えを示すことが求められていることになる。

確かに、そういった役割を果たすことはこれまでもあった博物館の大切な機能の一つである。しかし、それに加えて当館で展開してきた「古い道具と昔の暮らし」の出前授業は、教科書等で触れられている資料だけでなく、子どもたちがおよそ想像もできない特徴的な資料や、教室や図書室での学習では知ることのできない資料も持参することで、子どもたちの好奇心を育むことも意図している。また、何よりも実際に手で触れて体験する時間を確保していることこそが、学校現場の先生方に支持され、毎年多数の依頼を受ける大きな要因となっているのである。

とはいえ、今回の新指導要領及び改訂された教科書に沿って行われる今後の学習活動のニーズに応じていくことも我々博物館の使命である。そこで今回、従来通り体験する時間は十分確保しながら、解説の補足や事後の学習活動に直接的に活用できるような解説シートを作成することにした。これまでも授業後、先生方に渡す解説書は用意していたが、その内容を更に詳しくし、子どもたちが自ら調べ学習や振り返り学習に効果的に活用できるように内容を充実させた。例えば「麻糸」の説明書と共に関東展示室にある「麻蒔し桶」を掲載したり、「えんつこ」の他に「おひつえんつこ」を掲載したりするなど、関連する二次資料や補足説明を充実させた。

5 おわりに

博物館を活用する学習の最大の良さは、学習素材として「実物資料」を活用できることにある。「モノ」を通して考える、「モノ」を通して想像することができることにある。それにはある程度の時間的余裕と子どもたちの自由な学びを保障する指導者側の余裕もなくてはならない。

一方で学校教育は、決められたカリキュラムがあり目標が設定される。その目標を達成するための効果的且つ効率的な学習活動が求められると共にそこには常に一定の時間的制約が伴う。この違いは普遍的なものではあるが、新指導要領及び改訂された教科書からは、その違いが更に顕著に表れたようにも思える。

しかし、子どもたちの発達にはどちらも必要な学習であり相反するものでない。学校、博物館の両者が相互にその特性を理解し、発揮することにより、主体的・対話的で深い学びはきっと実現できるはずである。

(参考文献)

可児 光生「大きくかわる学習指導要領と博物館とのかかわり」【活用の手引き・活用実践集 平成30年度版美濃加茂市民ミュージアム】

文部科学省 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編

文部科学省 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編

6 学習資料

道具と暮らしのうつりかわり — むかしはどんな道具を使ってどんな暮らしをしていたのかな —

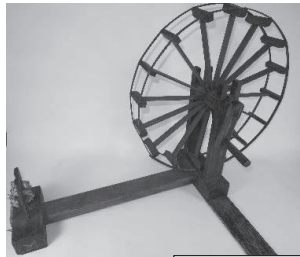
県立郷土館の出前授業でしようかいしたむかしの道具をふりかえってみよう！

「衣」のコーナー



あさのかわ【麻の皮】

麻をむしてやわらかくして取ったせんいで、麻糸のもとになるものです。綿はとてもきちょうで、また寒い青森県では綿花が育たないため、麻を衣服の原料にしました。



いとぐるま【糸車】

手で車を回転させながら、糸を作る道具です。麻の皮(かわ)を何本かねじり合わせて麻糸を作りました。



あさいと【麻糸】

麻で作った糸です。この麻糸が麻布のもとになりました。糸を入れているかごを「おぼき」と呼びます。

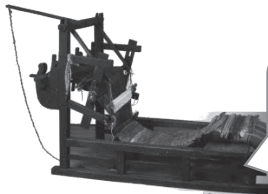


あさむしおけ【麻蒸し桶】

麻をむすために使われた道具。今の青森市浅虫は、もともと麻をむした場所というところからその名がついたと言われているよ。

あさぬの【麻布】

麻で作った布です。着物の材料になります。麻糸を「はたおりき」で織って布にしました。



じばた【地機】

糸と糸を編んで、布を織る道具。地面に置いて使うはたおりきは「じばた」と呼ばれたよ。

あさのみもの【麻の着物】

麻は通気性が良いですが、あまりあたたかなく、やぶけやすかったので胸や背中部分に、「さしこ」をしてあたたかくじょうぶになるように工夫しました。「さしこ」のことを津軽地方では「こぎんざし」、南部地方では「ひしざし」と呼びます。



今ではきれいなししゅうとして「さしこ」がほどこされた小物などもあります。

ももひき

腰をしめるひもに、あしを入れるためのつつ型の布を2本ぬいつけてあります。のちに、ズボンの形をした下着のことも「ももひき」と呼ぶようになりました。



まえかけ

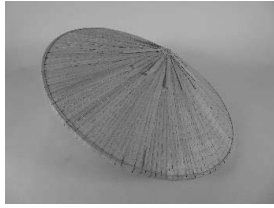
仕事をするとき、着物がよごれたりいたんだりしないようにつけました。「まえだれ」とも呼ばれます。



これらのむかしの道具は、今ではどんな道具にあたるのか考えてみよう！

すげがさ

スゲという植物で作られたかさ。雨や雪、日差しをよけるために頭にかぶりました。両手が使えるので農作業の時によく使われました



みの・けら

ワラやスゲなどの植物で作られた外出着。雨や雪、日差しをよけるために身につけました。地域によって、「みの」と呼んだり「けら」と呼んだりしました。



ワラで編んだはきもの。季節・天候などに合わせて使い分けました。



ふかぐつ



つまこ



わらじ



そうり

雪をふみ固めるためのはきもの。「ゆきぶみ」「ふみだわら」「オオグツ」などと呼ばれました。



てけし



ワラで編んだ手ぶくろ。寒さや汚れから手を守りました。

洗たく板

板に洗たく物をこすりつけて使いました。みぞがまがって上下向きを変えることで、洗い用とすすぎ用に分けて使いました。100年ほど前に、外国から伝わったものです。



手まわし洗たく機

お湯、洗ざい、せんたく物を入れて回し、じょう気の利用してよごれをおとします。日本人が発明し、さいがいなどで電気が使えない時に今でも使われることがあります。



炭火アイロン



中に炭火を入れ、その熱で布のしわやぬい目をのばす道具。明治時代に洋服などといっしょに外国から伝わりました。火の強さを調節するための空気口とえんとつがついています。

火のし

中に炭火を入れ、その熱で布のしわをのばしたり、服仕立てに仕上げたりするのに使う道具。炭火アイロン、その後の電気アイロンが出てくると、しだいに使われなくなっていきました。



こて



金ぞくの部分を火ばちなどに入れて熱くして、布のしわをのばしたり、おり目をつけたりするのに使いました。

むかしの道具を通して、くらしをよりよくしようとした人々の‘ちえ’や‘くふう’を考えよう。

道具と暮らしのうつりかわり — むかしはどんな道具を使ってどんな暮らしをしていたのかな —

県立郷土館の出前授業でしようかいしたむかしの道具をふりかえってみよう！

「食」のコーナー

<p>かまど【竈】</p>  <p>薪（まき）を燃料として使いました。</p>	<p>つばがま（^は羽がま）をのせてごはんを炊いたり、お湯を沸かしたりするの^{つか}に^い使^いました。土のほかレンガやタイル、銅などの^{きんぞく}金属^{どう}でできているもの、また移動できるものもありました。</p>  <p>電気（右）やガス（左）を用いたすいはん器^{しゅんぴ}ができると、まきを準備したり、火かげんを調整したりする手間がなくなりました。ただ、かまどでたいたご飯は今でも「とてもおいしい」と言われています。</p> 
<p>つばがま（はがま）</p> 	<p>ごはんをたくための^{かま}釜^{はがま}です。「^よ羽釜」と呼ばれたり、「つばがま」と呼ばれたりしました。青森県では「つばがま」とよく呼ばれていたようです。周りについた‘つば（羽）’から下がすっぽりとかまどに入り、かまどの火の熱^{ほのお}がしっかりと伝わるためおいしいごはんがたけました。炎や‘すす’がもれてこないようにつばを下の方に少し曲げる工夫がされています。また、強い^{しゅう}しょう^き気の力がかかるので、^{ふた}しょうぶ^で重い木のふたを使いました。ふたをうらがえて「まないた」として使ったこともあったそうです。</p>
<p>はこぜん【箱膳】</p> 	<p>食事の時、ふたをうらがえて中から食器を取り出して使います。いろりの周りに一人ひとつ、このようなお膳^{ぜん}を置いて食事をしました。 縁^{ふち}がついているので何個か重ねて場所を取らずにかたづけることができました。</p>  <p>食器を洗う水を節約^{せつやく}するために、食事の最後につけもので食器をふいたり、少量のお湯ですすいだりしたこともありました。</p>
<p>はんたい【飯台】 （ちゃぶだい）</p> 	<p>食事の時、脚^{あし}を出してテーブルとして使いました。使い終われば脚をたたんでかたづけられるようになっています。「ちゃぶだい」とも呼ばれました。一つのはんたいを数人で囲んで食事をするようになったことは、日本人の食事の仕方の大きな変化でした。</p>  <p>‘おりたたみ’になっていなくてはならなかったのはなぜかな？</p>

<p>おひつ（おはち）</p> 	<p>かまどで炊いたご飯を入れて使いました。ご飯は冷めると次第に湿気が出てきますが、この木でできたおひつに入れておくと湿気がたまりづらく、ベタベタせず、ご飯を長く保存することができました。「おはち」とも呼ばれます。おすし屋さんなど、今でも使っているところがあります。</p>
<p>わっぱ</p> 	<p>木のうすい板をまるく曲げてとし、底に板をはってできています。弁当箱です。おひつのように、木が湿気を吸い取ってくれるので、時間がたってもおいしいご飯を食べることができました。職人が一つひとつ手作りするものなので、一度にたくさん作ることはできません。また、今では職人も減ってきているので、ねだんの高い高級品となりました。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>その後、アルミニウム製（右）やプラスチック製（左）のものができました。</p> </div> 
<p>こおりれいそうこ 氷 冷蔵庫</p> 	<p>上に氷を入れて使う冷蔵庫です。電気の冷蔵庫ができる前のものです。氷を上に入れるのは、冷たい空気が下の方に流れる性質を利用するためです。ただ、氷は時間がたつととけて水になるため、水を外に流す管がついています。電気の冷蔵庫ほど冷えることはありませんが、食べ物がかんそうしにくい良さもあります。氷は氷屋で作られたものを買って使いました。昔は、冷蔵庫本体はもちろん、氷も安いものではなかったため、この氷冷蔵庫は一部の人たちのぜいたく品であり、広く多くの人に使われたものではありません。</p>
<p>かめ(左)・つぼ(右)</p> 	<p>食べ物や調味料などを保存するための入れ物です。厚手の陶器（焼き物）なので光を通さず、入れたものが長持ちします。様々な大きさや形のものがありますが、一般的に「かめ」は口が広く、胴体（どうたい）が下に向けてすぼまっていて、「つぼ」は口が小さく、胴体がふくらんだ形をしています。それぞれふたが付いているものもあります。塩や梅干し、しょう油やみりんなどを入れて使いました。中身が無くなっても入れ物は使い続けるのでゴミは出ません。</p>
<p>石うす</p> 	<p>そばや小麦、大豆などを粉にする道具です。外国から伝わってきた道具と考えられています。石にはきざみ目がついていて上の石が回転することですりつぶされます。時計と反対に回して使うものがほとんどですが、新潟県の佐渡地方などには時計回りに回すものもあります。ミキサーなどの機械よりも時間はかかりますが、回転の速さを手かげんで調整できるので風味が悪くならず、香りが良く、質の良い粉ができる良さがあります。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>上下の石のきざみ目が、ぎゅくになっていて、回すとすりつぶされます。</p> </div> 

道具と暮らしのうつりかわり — むかしはどんな道具を使ってどんな暮らしをしていたのかな —

県立郷土館の出前授業でしようかいしたむかしの道具をふりかえってみよう！

「住」のコーナー

<p>しょく台【燭台】</p> 	<p>家の中の明かりとして使う道具の一つで、ろうそくを立てて使います。木や金ぞく、焼き物などで作られているものがあります。</p> <p>「燭」とは明かりのことで、燭を置く台なので燭台と呼びます。ろうでできた燭で「ろう燭」、のちに「ろうそく」と呼ばれるようになりました。しょく台を木と紙のおおいで囲ったものを「ぼんぼり」と呼び、ひな祭りでおひなさまとならべることがあります。</p>
<p>てしょく【手燭】</p> 	<p>しょく台に持ち手をつけたものです。持ち運びができるので、暗い場所を歩く時に使いました。ろうそくを立てるところ（しょく台）を前にして、差し出すように持ちます。脚がついているので、置いて使うこともできます。</p>
<p>てど</p> 	<p>明かりとして使う道具である「行灯」の一つです。部屋に置いて使うものもありますが、もともとは、持ち手が付いて外に持ち出して使うものでした。</p> <p>「てど」とは、「手で持つあんどん」＝「手持ちあんどん」を短くして呼んだものです。ろうそくの周りを和紙で囲むことで風が吹いても火が消えにくくなりました。</p> <div data-bbox="874 1003 1225 1115" style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>上に出ているほうを引くと、ろうそくを立てているしょく台が引っよんで上がってくるしくみで、ろうそくをとりかえやすいようになっているよ。</p> </div> 
<p>かぎしょく【鉤燭】</p> 	<p>しょくだいに「かぎ」（ひっかけるところ）をつけたものです。</p> <p>はしら 柱などにさしたり、ひっかけてたりして使えるようにしてあります。柱にさす「かぎしょく」が使われていたことがわかるきずあとが、柱に残っているむかしの家もあります。</p> <p>写真の「かぎしょく」（右）には、「火の用心」と書かれていて、安全を願う人々の願いが込められています。</p>
<p>ランプ</p> 	<p>とうゆ 灯油をひたした綿糸の芯（しん）に火をつけて明かりにする道具です。</p> <p>芯を上げ下げして明るさを調節しました。使い続けると、ガラスの部分（ほや）に「すす」たまるので、中をそうじしなくてはなりません。ランプのそうじは、手が小さい子どもの仕事になることが多かったようです。</p> <div data-bbox="751 1637 1129 1693" style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>ランプをそうじする子ども</p> </div> 
<p>あぶらざら【油皿】</p> 	<p>油を入れた皿に芯をひたしてその先に火をつけて明かりにする道具です。芯は木綿の糸やイグサなどの植物の皮をまとめたものを使いました。油をひたした芯に火をつけると、油がある間は芯の先だけ燃えます。油が無くなると芯も燃え切り、明かりは消えます。</p> <p>ねんりょう 燃料とした油は、なたね油などの植物の油のほか、海辺の家では魚やくじらの油が使われることもありました。</p>

これらのむかしの道具は、今ではどんな道具にあたるのか考えてみよう！

<p>ゆたんぽ【湯たんぽ】</p> 	<p>中にお湯を入れて布でくるみ、ぬのふとんなどに入れて体をあたためます。場合によっては、水を入れた湯たんぽをストーブであたためて使うこともありました。表面がでこぼこしているのは、あたたかくなる部分を広くするためです。</p> <p>戦争中は金属が貴重だったので、陶器（焼き物）でできたゆたんぽ（左）を使ったこともありました。</p>
<p>こたつ・あんか</p> 	<p>こたつ、あんかは手足をあたためるためのだんぼうの道具です。今でも電気を使ったこたつは広く使われていますが、むかしは、炭火が多く使われました。あんかは、こたつに入れるものや一人用のものなど大きさは様々あります。こたつの中にあんかに直接接触れないように、脚は伸ばさず、ひざをおったり、あぐらをかいたりして主にひざから下をあたためました。</p>
<p>安全あんか</p> 	<p>あんかの一つで、かたむけても炭火や灰がこぼれないような工夫がされています。万が一、ひっくりかえっても安全、ということでこのように呼ばれます。こたつなどに入れて使うことが多かったようです。</p> <div data-bbox="560 860 1177 913" style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> <p>たて、よこどちらにころがしても隅がこぼれません</p> </div> 
<p>ひばち【火鉢】</p> 	<p>炭火をおこし、体をあたためたり、お湯をわかしたりするだんぼうの道具です。中には炭が燃えた後の灰が入っています。また、炭をもつための「火ばし、灰をならすための「灰ならし」、お湯をわかすための鉄びんなどをのせる「五徳」も使いました。</p>
<p>じざいかぎ【自在鉤】</p> 	<p>いろいろの上につるして、なべや鉄びんなどをひっかけてあたためるための道具です。上下の長さを自由自在に変えて火に近づけたり、はなしたりすることで火かげんを調整します。横の木（横木）が、たてにのびるぼうをとめる役目をしています。‘いろいろ’と‘じざいかぎ’があると、明かり、だんぼう、調理など様々なことができました。</p>
<p>てんびんぼう・水おけ</p> 	<p>‘てんびんぼう’は水を入れた‘水おけ’などの荷物をつるして運ぶのに使います。水道がない時代は、この道具を使って井戸や川から水をくみ、家まで持ってきました。子どもの仕事になることも多かったようです。水をくむ他に、魚屋、とうふ屋、金魚屋などの商人も売り物をてんびんぼうでかついで売り歩きました。</p>
<p>えんつこ</p>  	<p>赤ちゃんを布などでくるんでこの中に入れました。今でいう「ベビーベッド」です。ワラをあんだものや木でできたおけ型のももありました。家の中だけでなく、田んぼや畑に持って行き、使われたことも多くありました。場所によっては「えいじこ」、「えじこ」などとも呼ばれたところもありました。</p> <div data-bbox="603 1890 1321 1966" style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> <p>ご飯が冷めないようにするために「おひつ（おはち）」を入れる「おひつ（おはち）えんつこ」もあったんだって！</p> </div> 